

## 炉 辺 医 話

- 医 療 の 原 点 -

阿 岸 鉄 三

板 橋 中 央 総 合 病 院 血 液 浄 化 療 法 セ ン  
タ ー

< 炉 辺 医 話 の い わ れ >

今月号から、エッセイ風のコーナーの執筆を担当します。炉辺医話(ろへんいわ)と名付けました。ちょっと今時、古くさくて照れくさい名称ですが、これでやることにしました。

医話は、もちろん医学・医療、およびそれらの周辺のことに関するを話題とするという意味です。炉辺には、少し説明がいるでしょう。近頃は、特別の状況でなければ、囲炉裏・暖炉など炎の見える直火の炉がなくなりました。わたしの年齢でも、北海道で石炭ストーブの炎を見ていま

すが、炉の経験はありませんでした。最近になり、暖炉のある家で週末を過ごすようになって炉端の心地よさを知りました。

映画か、テレビからの記憶によると、炉端には老人がいます。暖炉を持って判ったのですが、いい火加減を保つには、少しずつ薪を追加し、薪の並び方に注意しながら火の保守・管理しなければならないのです。年寄り仕事として適当だったのだと思います。ちびりちびりと大した量ではないけれど酒を飲みながらやるのがよいのです。相手になる人がいても、いなくても昔語りをするのです。ときには、うるさいこともあるけれど、たまには経験にもとづいたちょっとはためになることをいったりもします。堅苦しくなくて、それでいて、少しは役に立つ話のコーナ

ーにしたいという意図の結果が、炉  
辺医話なのです。

< 癒しは、古代への懐古 >

ところで、暖炉で炎を見ているう  
ちに突然思いつきました。どうして  
炎をみると心地よいのだろうか。ア  
ウトドアでのキャンプファイヤー・  
炉の火・南国のリゾートの松明など  
炎のある火をどうしてヒトは好むの  
でしょうか。安堵感・安らぎまで得  
るのはどうしてなのか。明るさ・暖  
かさ・熱さ・利便性では、電気機器  
の方がはるかに勝るのに、このよう  
な感覚は出てきません。これは癒し  
の感性への接触のせいではないので  
しょうか。では、癒しとはなんなの  
か、どうして現代社会では癒しが求  
められるのか。

結論を先にいうと、わたしは、癒

しとは、古代の生活への懐古と考えています。数十万年といわれるヒトの歴史のうち、数千年前までヒトは森の中で暮らしてきました。数百年前まで、ヒトは森と密接な関係を持った生活をしてきました。コンクリート環境での生活の経験は数十年に過ぎません。森の中でのヒトは、猛々しい野獣に襲われる弱い動物に過ぎませんでした。しかし、恐らくは木を燃やして得た炎のある火があると野獣から身を守ることができたのです。これが、安心感の原因で、われわれの脳の中に遺伝子を介して記憶として残っているのです。この記憶は、意識される記憶である必要はありません。ユングのいう集団的無意識であっていいのです。ほかの癒しといわれるものについても同じようなことが当てはまります。ヒト同士

の皮膚の接触は、親子・仲間の間近  
な存在を、川のせせらぎは水の存在  
を意味します。

#### < 生活習慣急変病 >

遺伝子情報の異常が、肉体的・精  
神的形質の変化として固定化するに  
は、数万年かかるように考えられま  
す。ヒトの住む環境は、激変しまし  
た。普通いわれている生活習慣病は、  
生活習慣の急激な変化から起きるも  
のでむしろ生活習慣急変病というべ  
きものと考えています。現在のとこ  
ろ、生活習慣急変病は、糖尿病・高  
血圧などのように肉体的に現れた病  
的状態に関心が集まっていますが、  
精神的・霊的状态にも同様なことが  
起こっていると考えるべきでしょう。  
癒しと関係で、あるいは関係なしに  
語られる代替・相補・伝統・民間医

療などと呼ばれるものの本質は、自然治癒などといわれるように、本来、自発的・自動的な癒しの機能を活性化・賦活化することにあると考えられます。16世紀フランスの外科医アンブロアズ・パレが“わたしが処置をし、神が癒し給うた”は、このことを意味し、医療の原点が此処にあることを示唆するものと考えられます。